

## —第5編— フェニキア人の遺構と戦争

現在、レバノン<sup>\*1</sup>と呼ばれる地域が初めて歴史の表舞台に登場したのは、紀元前3000年ごろに遡る。その頃、内陸部に鬱蒼とした森が茂る海岸線には一連の都市群が成立しており、セム系フェニキア人がこの地に居住していた。自らを「シドンの人<sup>\*2</sup>」と呼び、国を「レバノン」と呼んでいた。この地域の自然とその位置のために、フェニキア人は、貿易と交渉に従事する場所を海（地中海）に求めたのであった。そして、地中海東端に位置するティルス<sup>\*3</sup>とシドン（別称サイダ）は、海上・通商上重要な拠点となった。しかし、それ故に12世紀には十字軍にたびたび占領されるなど、その歴史は荒波にもまれ続けることになる。



写真 05-1 シドンのスーク



写真 05-2 シドンの港

サウジアラビアに赴任する途中ベイルートで仕事をした折りに、同僚のレバノン人ヤハヤと連れだって、そのサイダとティルスを訪れた。内戦の狭間の緊張した時代であった。地中海の真珠と言われたサイダの港町は今でこそ復興著しいが、当時はイスラエルとの距離や内戦の影響で荒れたまちであった。それでもたくましく暮らしと往時の豊かさの一端を見せつけてくれた。

一方のティルスには、地中海に開けた神聖ローマ帝国時代の伸びやかな遺跡の列柱やかつての浴場の遺跡がある。今でこそ世界遺産となつてその豊かさをトレースできるが、ライフルを肩にかけた青年に出会い、戦時に暮らす人々の悲哀に直面した。直後に近くの難民キャンプに砲撃があり、突然兵士が蜘蛛の子を散らすように現れた。その現場では、特に恐怖感を覚えることはなかったが、翌朝ベイルートに戻り新聞で数十人死亡したことを知った時、震えが止まらなかつた。

豊かな自然や遺跡と全く不釣り合いな現実には、不条理な理不尽さを感じるのはここだけではない。



写真 05-4 遺跡で遭遇した民兵



写真 05-3 ティルスの遺跡

\*1 Lebanon、首都はベイルート

\*2 Sidon:レバノン南部の港町

\*3 Tyres:レバノン南部の古都